

残像抄(6)

『芳名録』より —澁澤敬三先生ほか—

大和文華館 館長 石澤正男

前号では大和文華館の揺籃時代というべき南河内の有名な門跡尼寺道明寺に仮の事務所を置いていた道明寺時代(1946~1952)の『芳名録』の最初の署名者・故上野直昭先生について、読者にお伝えしました。この芳名録に署名を残された方々は、上野先生の他には僅かに28人で、その中、1950年2月2日に来訪された建築史・庭園史の研究で著名な堀口捨己氏が借景の庭園で有名な大和郡山市小泉の名刹慈光院住職尾関惠京師(現大徳寺・大仙院住職)と御一緒に来訪されたのを除きますと、ほとんど近鉄関係の人々、いわばお役目がてらの来訪と見られますので、お名前を出すのは差し控えることにします。

事務所が道明寺から大阪市東区船越町に移って船越町時代(1952年7月~1965年10月)となりますが、道明寺時代が間借り状態であったのと違い、船越町の方は敷地が50坪余、延床面積43坪余の鉄筋二階建のしっかりした建物で、四方はコンクリート壁に囲まれた独立家屋でした。

道明寺時代の『芳名録』は縹色の無地の布表紙で、中身は生漉の楮紙を用いた和綴でしたが、船越町時代のもは一回り大きな和綴ですが、表紙は花文様の更紗で題簽には金砂子を濃く蒔いた、中々しやれたものが用いられております。その題簽には「芳名録」とだけ誌され、扉をあけると「来観者芳名録 於船越町 大和文華館」と道明寺時代のものと同様に三行に分

けて書かれています。もちろん矢代先生の筆です。

前号に書きましたように道明寺時代から船越町時代になりますと、第一に交通の便がよくなったことと、美術品を一番盛んに購入していた時代であり、職員の数も道明寺時代よりは殖えていましたので、矢代先生が来阪される時に、グループで来観されるのが通例でした。道明寺時代よりは広くなったとはいっても、陳列設備が出来ているわけではないので、来客のために倉庫から貴重な美術品を持ち出してきて、次々と御覧に入れるということは、職員にとっては中々大きな負担であったに違いありません。特に1950年3月には大和文華館の美術史専門の「大和文華」と題した機関誌の第一号が発刊され、それは現在に引き続いてありますが、第36号(1962年1月発行)までは季刊でしたから、不定期に来訪される美術品観覧希望の来客のもてなしは、職員にとっては時にはかなりの重荷であったろうと想像されます。

船越町時代の『芳名録』に署名されている最初の来客は1952年9月13日の澁澤敬三氏(1896~1963)一行五人です。

澁澤先生は明治時代の代表的財界指導者の澁澤栄一子爵の令孫で、日本銀行総裁、幣原内閣の大蔵大臣を始め数々の要職に就かれた著名人ですが、吾々にとってはこの方は、財界関係の激戦にありながら、日本では欧米諸国に比較して非常に立ちおけている民族学の

興隆に力を尽された先覚者であり、大恩人として忘れることのできない方であります。

澁澤先生は早くも1921年に自邸内にアチック・ミュージアム(Attic Museum)を設け、民具の蒐集に着手され、1934年には日本民族学会を設立し、それに付属する博物館を建設し、それまでアチック・ミュージアムで集められた1万5千余点の民具を納められました。澁澤先生は戦後連携学問の総合研究の必要を強く主張され考古、人類、地理、言語、宗教、社会、民俗、民族、心理の九学会連合を作り、その会長として学会の発展に尽力された功績は偉大なものでした。

美術関係の私達にとって、澁澤先生について特筆しておきたいことがあります。それは澁澤先生が戦前から日本の古い絵巻物を中心とする絵画に表現されている庶民生活に関する一切の事物を、事項別に採りあげて辞書化しようとする、全く前人未踏の発想をもたれ、その実現に着手されたことでした。

この事業はいろいろ困難があったが容易に実現されませんでした。角川書店が1958年から69年にかけて第一期の日本絵巻物全集24巻を刊行した機会に、始めて陽光を浴びることとなり、同全集の附録として「澁澤敬三編著 絵巻物による日本常民生活絵引」と題されて、第一巻は1964年12月31日付で発刊され、引き続き第2、第3、第4と続刊され、最終の第5巻は1968年1月10日付で発行されて完結されました。第一巻の出た時は



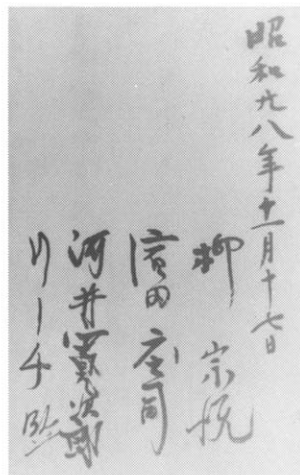
澁澤敬三先生(毎日新聞社提供)

既に澁澤先生は逝去された後で、誠に悲しむべきことでしたが、故人の熱意を尊重し、その遺志の貫徹に尽された8人の協力者(ここではお名前を省略しますが)の方々の並々なぬ篤実さには深い感激の念を禁じえません。

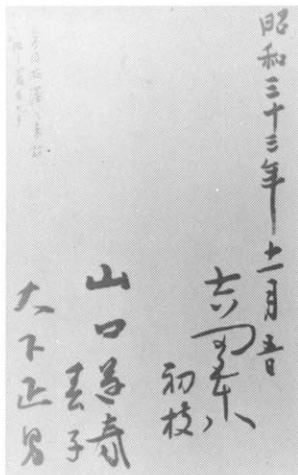
この「絵引」に取材された作品は四天王寺の扇面古写経、酒井家の伴大納言絵詞、高山寺の鳥獣戯画、朝護孫子寺の信貴山縁起絵巻のような平安末から鎌倉時代にかけての有名な作品を始め、勧喜光寺の一遍上人絵伝、御物の春日権現験記絵のように龐大な取材資源をもつ絵巻24種に及んでいます。

この「絵引」によって吾々は今までどの位学恩を受けているか量り知れぬものがあります。欲をいえた、今後もこの「絵引」事業を未開拓の分野にまで拡げてもらいたいと思いますが、それは後に続くものの義務でありましょう。

澁澤敬三先生一行の次に署名されているのは9日おくられて来訪された黒田源次先生(1886~1957)であります。黒田先生は間口の広い学者で、古版画(日本と中国にわたる)、初期洋風画、中国の北



『芳名録』より('53-11-17)



『芳名録』より('58-11-5)

方系陶磁、司馬江漢等に関する多くの業績を残されましたが、当時は奈良国立博物館長の地位にあり、その時の訪問は、矢代前館長が蒐集された大和文華館収蔵美術品中の名品を選択して、奈良博で初めて公開する打合せのためでした。

この展覧は絵画29件、陶磁器31件合計60件で、いずれも名品の名にふさわしい傑作ぞろいでした。会期は11月3日の文化の日から11月30日までで、大変な人気だったそうです。

船越町時代の『芳名録』に署名された方々には重複するものを除いても182人となり到底ここで御紹介し切れるものではありませんので、思いきって省略させていただき、ここでは御署名を掲載した方々だけに限って御紹介することになりました。

1953年(昭和28年)11月17日には柳宗悦(むねよし)(1889~1961)、濱田庄司(本名象二)(1894~1978)、河井寛次郎(1890~1966)、パーナード・リーチ(Bernard Leach 1887~1979)四先生が並んで署名されているのは数ある芳名録の中でも壮観の感があります。そこへ

もう一人富本憲吉(1986~1963)先生の御署名が加わっていたならば正に圧巻というところでしたが、生憎富本先生はごいっしょではありませんでした。これらの方々には新しい陶芸創作の理念で固く結ばれた同志の方々で、その業績は日本ばかりでなく国際的にも一時代を画されたものですから、今更説明の必要もないと思います。

最後の写真は1958年にとびますが、吉田五十八(いそや1894~1974)先生と初枝夫人、日本画の山口蓬春(1893~1971)画伯と春子夫人、それに美術出版社の天下正男(1900~1966)社長です。吉田先生は七年後に竣工した大和文華館の建築設計者で、当時は東京芸術大学教授で日本芸術院会員、1964年には文化勲章を受章されており、数寄屋建築の研究から新様式を創り出した人として有名です。山口画伯も芸術院会員に任命され、多くの名作を残されましたが、お二人とも東京美術学校時代に矢代先生の教えを受けた卒業生でした。('80-7-17)

季刊 美のたより No.52

昭和55年 8月6日

発行 大和文華館